

1981.11.29

のだろう。」といふもやもやしたものを、見ていろ側に広げていったのである。でさる二とならよりわかりやすくするために、登場する人形の解説とか、踊りの大まかな意味の説明がほしかった。金明珠娘が、踊りの中で、身につけていた帯を、パッと解き放つた動作など、あとで「帯は三十七度線を示すのではないだろうか」という話を聞けばなるほどと思うのであるが、見ていろ時は「一対何をするのだろう」ととまとだけである。訴えていふ事を伝えるためには、ある程度わかりやすくなければと思う反面、韓国の現状を考えるとこれがせいじつけの表現かとも思うのである。

「ソウル・アニサンブル」は専属の劇作家、作曲家舞踊、演出照明、人形制作、人形操縦の各専門家によって構成されている。金明珠さんと李貞錫代の踊りもさう二とながら、彼等に傍して舞う人形の拡大された影は、人形の操作技術の巧みさを物語るとともに、計算された照明効果の確かさをみせる。一方、各人形の表情は、ある人格をまさに絵にしたようであり、人形制作者の「人をみる眼」の鋭さ及び暖かさが感じられる。このようないいのは、照明担当者や人形制作者など舞台上に出演はしない各パートの専門家全員の調和があつてこそアニサンブルは作り出されるのである。

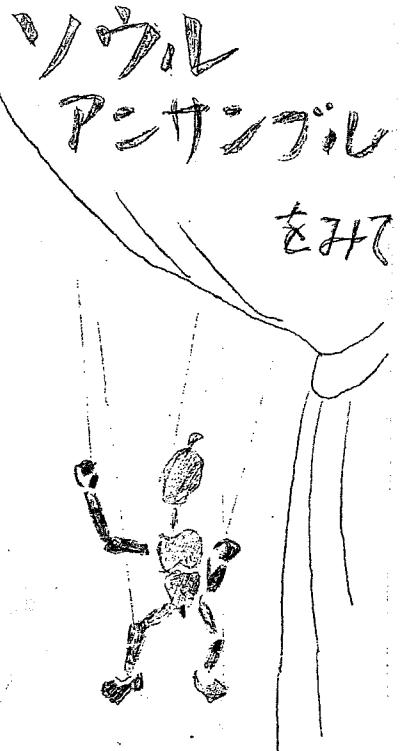
1981.11.29

十一月十日、神戸学生青年センターで、「ソウル・アニサンブル」の公演があった。あやつり人形と現代舞踊が一つの舞台の上でその名のとおりアンサンブルへ合奏」をかなげた。出しものは、一、「洪同知ヘ木シドンギ」の外出しと、二、「農舞」。

「洪同知」とは、韓国の人形芝居に登場する主人公の名前である。物語は暗い人形箱から何百年ぶりに見覚めた「洪同知」が、現代の韓国を見て歩くという設定である。おちゃんちんを忘れずにつけてもらつた、なかなか人形はなれした表情の人形「洪同知」。トウショウズをつけて、しなやかな体で舞う金明珠娘。

人形と彼女との共演である。「洪同知」の他に風呂敷のよくな衣をついた人形も登場し、分断されていいる朝鮮半島の現状を象徴しているのであろう。彼女の踊りとからみあう。いまわの際のようにあえぎ横たわる彼女をじつとみつめていた人形は何を表していたのであろう。

「農舞」は、申康林の同名の現代詩集を土台につくられたものである。土俗的な詩情を湛えた二の詩集は力強い生命力を内包していると評価され、発禁騒ぎにさえたものである。舞台では、農夫役の李貞錫代の踊りで農民生活の不安と絶望が演じられる。そこへ郷鎮狂代の人形操縦で無言でありながら雄弁に観客にはたらきかける人形が登場し、農夫に希望を与えてい



ハ 巻角枝

二つの出しものとも、せりふは全くなく、音楽と照明が舞台を支えた。二人へ一人と一体の演技の真摯さがもたらす緊迫感が、彼等の訴えようとするところを見えて、自然に伝え、真剣にさせた。とはいっても、せりふがないのであるから大筋を書いたパンフレットへ元読んでいた者にはちんぶんかんぶんの感もあり、「わかりにくい前衛劇」の例外ではないかった。しかし予備知識のある者も無い者も、各人がそれなりに胸内にその訴えられているものを創造した。「どうぞよくわからぬが、こういふことをいりたい」

ソウル・アニサンブルは一九八〇年に結成された韓國の伝統的人形劇、仮面劇、民族芸能などの伝統を積極的に現代芸術にとり入れて、現代舞踊と人形劇と音楽とをひとつの舞台の上で、融合調和させて、新しい韓國文化、芸術を創造しようとしている。前衛といわれる二とにつけ彼等自身は否定しているが、今までにない新しい形式を目指していふといふ実にありて、やはり前衛といつていいであろう。

ソウル・アニサンブルの原名は、「ソウル・オウリム」城皇堂」といふ。「オウリム」は、交流という意味で城皇堂は、民衆が集つて自らのことを相談し、決定し実行した場所であったことに由来する。主宰者の沈雨辰代の次の言葉は印象的である。「朝鮮民族の最終的な廟は統一であり、統一のためにはオウリムがなければならない。ところが現状は対話がなされていない。ソウルでオウリムがなされ、平譲でも同じことがなされれば、最終的には朝鮮半島のオウリムとなり、統一への近道となろう。」そつての考え方から、ソウルオウリムの統一への願いが舞台にはこめられているのである。沈雨辰代の風貌は彼の言葉と共に忘れかたく胸に残る。